

質 疑 応 答

司会 かなり多くの質問を頂きましたが、時間があまりございませんので、こちらで先生お一人に対し、一つずつの質問を選ばせて頂きました。

まず、ラドケ先生への質問は、経済と政治の区分についてです。

次に、千葉先生へ。「自己の法文化を主張することは資格だけでなく、責任であるのだ。互いにシェアし、向上するために、特に日本にその責任があると考えられるのだが、どうであろうか」という質問です。

そして、姜先生には、後程時間があつたら説明するとおっしゃっていた点についてお願いします。

最後に石澤先生への質問です。「ポルポト時代における虐殺はナチス時代のユダヤ民族の虐殺を想起させる。このようなものには、国土全土でオープンになされたところにその恐ろしさがああり、西欧、アジア社会における歴史的記憶の証言として後世に伝えねばならない。カンボジアでの遺跡修復とカンボジア民族の民主化、国土再生とは、どのような相互関係があるのでしょうか」という質問です。

ラドケ 経済と政治はどのように区分できるのか。私の専門は中国ですから、金近代中国の歴史からみて質問に答えようと思います。「政治」を運営する為の機関・組織は政府中央政府や最低レベルの県政府の中だけにあるとはいえません。社会のいろいろな組織、たとえば宋族グループも、広い範囲で諸分野にわたって活動していますが、その活動の一部分は近代政府の政治領域に属するものであります。しかし、それは、中国に限らず、しごく一般的な問題です。

日本の会社の場合、アメリカの会社と比べると、Public Relationsを担当する特別なセクションが少ないのです。すると、日本の会社では組織の中で誰がどこ

のセクションが、PRに携わるか、まず具体的に調べなければなりません。それは必ずしも組織図ではわかりませんので、換言すれば、機能の組織への「分配」を弾力的に考えるべきものです。

中国では数百年前から20世紀まで地方「政府」と並んで宗教組織も政治・経済・社会諸分野にわたって活動していました（地域と時代によって違いがありますが）。共産主義中国の人民公社の理想は、政治と経済を区別しないで、政治的、経済的、軍事的機能を同じく果たすべきとしています。今でも案外、このような構造は続いています。例えば、一つの村は共同体的に（と言っても、ロマンチックな共同体ではないのですが）、会社を作ることがあります。そして、村全体があたかも一つの会社ようになって動いているケースもあります。このような村は、政治組織であるか、経済組織であるか、物と福祉の分配は政治的に考えていいのか、経済的に考えていいのか、という問題があります。このような場合、中国の政治的・経済的機能と組織の関係はアメリカ、ヨーロッパのそれとは違うものです。今は詳しく説明するわけにはいきませんが、組織の名称では必ずしもその機能と分野がわからないので、政治・経済を区別するときに、その定義は組織を分類して定義するのではなく、抽象的な機能の定義によって行わなければなりません。

ただし、グローバリゼーションの教訓もあって、私は、社会の長期的な変更を、政治・経済のパラダイムより、次のようにアプローチすることをサジェストします。私は、伝統的な分野：政治学・経済学・社会学の諸分野のいずれかに、「社会化」と経済発展を結び付けて、グローバル化を個人・家族（核家族・拡大家族）・会社（物を作る組織）・国家の変更しつつある分業として捉えて、別のアプローチを提起します。こういう発想では、個人が社会化されるだけでなく、機関—国家そのものも含めて、社会化されるとも考えられます。「今日、市場が政府を判断する」という現象は、政府の社会化を指すのです。ある経済学者は、「ソ連崩壊で、経済学は政治学より大事になった」事の証拠として捉えるかもしれませんが、広い意味の社会化のプロセスは、経済学だけで説明でき

ません。人間は社会の中で自分が自由に活躍・行動できる領域を開拓しようとし、ます。その一方で、上述の次元の組織に対して、自分を保護してくれることも期待しています。その組織はコンプレックス（複合的）になるに連れてその anonymity が高まりますが、グループの中でいつものようにエリートたちがパワー争いに巻き込まれています。グローバル化といっても、こういうプロセスは、文化や地域によって違うだけでなく、同じ地域でも、50年代と90年代のヨーロッパ・米国の様子も随分違ってきました。東アジアの中でも、同じようにこれから30年の一世代の間は、地域の同質化は考えられないのです。

千葉 資格と責任には勿論一般用語の意味がありますが、私は、資格を社会的権利、責任を社会的義務という意味に使っております。そうしますと、次のように言うことができます。非西欧の部族あるいは民族が自分の法文化を主張することは、従来の世界の状況においては遠慮し控えておりました。しかし、私はそうではなく、積極的に主張してよいことで、むしろ、それが権利であると言いたい訳です。しかしそれは法律上ではなく社会的な主張なので、それを資格と申しました。

しかし、自己の法文化の主張には落とし穴があります。それはしばしば古くなって陋習となるか、自分勝手な自己中心主義になって、自分以外の人、自分達以外の他民族は殺してしまっても、食べてしまってもいい、食べるべきである、という独善的な固有法になります。こういう固有法をそのまま生かす訳にはいかなくて、これを他と比較して自己を改善する責任がその部族にはあるという意味で、責任を自己の法文化を主張できる資格と区別しました。

日本の責任に対しては、私も同感で、それには二つの理由があります。第一に、西欧の知恵が創り出した科学、学問を非西欧諸国の中で最もよく消化した国は日本に違いありません。消化の程度、内容については若干の疑問がござりますが、そういう世界の先頭に立った日本は、今不幸にして遅れている他の仲間のために今自分で出来ることをする責任があります。

第二に、戦争を引き起こした日本はアジアの多くの国々に大変迷惑をかけました。それに対する贖罪を法の世界においてしなくてはなりません。すなわち、アジアの民族の持っている固有法には主張する権利があるということに気が付いたからこそ、その事を教えてその行に協力する責任があるのです。そういう意味で、ご意見に賛成いたします。

姜 まとまらなかったもので、先ほど話せなかったことを話したいと思います。まず、人間の身体性とメディアの関係が重要だと最近思うようになりました。ある種、ジョン・ロック以来、いわば個人というのは自分の身体、つまり、我が身を自らに帰属させ、そして帰属するがゆえにそれを自由に処分できる訳です。それは経済的に言えば、労働力として自由に自分の身体をある一定の時間、雇用関係の中に売るということであったりします。いわば自分の身体を我が身に帰属するものとして個人が自由にそういうものを認め合うような一つの共同性というものが自然に成り立っているというもとの、近代社会というのは形成されていると思います。

私はグローバル化というのは17世紀から始まっていたと思うのですが、今のグローバル化という現象を見ますと、自分の身体性が共同的にどこに帰属するのか、非常に分かりにくく、見えなくなっていると思うのです。これが、ポストモダンと呼ばれているのですが、実は、身体性と言われているものをジェンダーで解きほぐしたり、あるいは、その解明というものが、人類学の成果も含め進んでいると思われまます。しかし、他方、メディアというのは、かなり私達の創造を絶する様な仮想空間を創り出している。その中で、一つの、ある方の言葉を借りれば、「Voluntary Sociability」— 自発的社会結合の形成— こういうものの一つの動機がなくなってきた。そうすると何が起こるかということ、やはり多様な中にある共通性とは何か、それを差し当たりHuman Rightと言ったりするのでしょうか、どうもそれでもきっと理解できない。私はそこに何かパブリックなもの、公的なるものを新しく再構成しなくてはいけないと思います。

当然ながら、日本では、公的なもの＝国家になってしまっているのですが、やはりパブリックなものというものはそうではなく、私というものの、そしてその中で自発的に形成されていく社会的結合関係というものが常にベースになって初めて公的なものが生きてくる訳です。そういうものが、いわば、今のグローバルな社会の中で、まず家族や自分の身体、地域社会、もっと大きな社会、国家に至るまで非常にぐらついてくる中、自分の身体の帰属性というものが「場所性」を失っていると思うのです。例えば、若い人達がインターネットを通じてある種のサイバー・スペースの中で生きている限り、自分のこの身が帰属している社会、地域、共同体に対する責任も発生しないと言いましょか、それがまさしく今のヘッジファンドや様々なものすごくカジノ化したあるグローバル資本というのはそれで動いていると思います。かつては、ある具体的にパブリックなものが一つの社会の中に形成され、その中で人々は、ある合意のもとで自分達の社会を運営していく、そういうものを支えている身体の帰属意識が我々の民主性や我々の社会を支えていたと思うのです。そうしますと、そういうものがなくなる、希薄になりますと、一つ、暴力的な形で、それが発揮されるか、あるいは、ひどいファイナンス・スケープ、これはもうすでにパブリックとは全く関係なく自分の帰属場所がどこにもないという形で資本が動いている訳です。

こういう中で、私達は、どうやって自発的な Sociability というものを自分の身体の中からもう一度立ち上げられるのか、それを今、私達は問われているのではないかなど、思われるわけです。それが出来ませんと、私達の社会を支えているファンダメンタルな価値がもう一度、根源的な坩堝にさらされていく訳です。それは例えば、生命の問題から、何故人を殺してはいけないのか、何故我が身を売ることが駄目なのか、その様な、いわば、我々の近代社会の根本にあった一つの規律が根底から問い直されていく。そうして、私より何十年下の十代の人達を見ていると、私の身体感覚とはどうも違うものが出来ているというふうに感じられて仕方ないのです。ですから、そこでは、私達の世代が当然と

して考えている感性やあるいは当然の社会性といったものが根底から問い直されているというこをもう少し考えていくべきではないか、そうした中で初めて異質な他者というものを受け入れられる時がくるのではないかと考えます。

もう一つ、手短かに言いますと、先ほど千葉先生が過去の歴史の記憶について話しておられましたが、例えばファイナンス・スケープの問題で考えますと、アジアの経済ミラクルは幻だった、ある種のバブリーなものが広がっていったと言ってもいいと思いますね。今後、それを安定させる為に IMF とは違うアジア基金のようなものを作ろうとした場合に当然、日本の円がその中心にならざるをえない、しかしそれがなかなか出来ないのはなぜか。やはりこれは、ただ単に今の国際経済や国際政治の力学だけではなくして、過去の歴史の問題といわれるものがどこかに古巣としてアジア諸国の中にあり、それが通貨の安定と言う問題にまで波及している。つまり、グローバル化というものをもう一度横軸だけでなく、つまり空間の広がりだけでなく、時間軸の問題でも歴史の問題と関わらせて考えていかななくてはならないと思う訳です。

私自身、アジア通貨を安定させるには日本の主動的な役割がかなり必要だとは思いますが、それが主体的にも客観的にも出来ないのは何故かと言いますと、それは経済の効率性や、安定性の問題ではない、そういった様々な問題がグローバル化を通して噴き出しているということを述べたかったのです。

石澤 ポルポト問題についてでございますけれど、私も80年代にカンボジアに入りました。そのとき、ベトナム兵に守られながら調査した訳です。そのときに強制キャンプから村に帰る人の群れに出会いました。本当にうつろな目をしておりまして、非常にショックな光景でした。そのときに、食料が十分でないのに何故遺跡を保存するのだという声が上がりました。ポルポトという厳しい時代に生きてきた人達の食料と身体的なケアの方が先だと言われたのも事実です。勿論、私もその意見に賛成でございますが、そのときやはり、食料も遺跡も同じです、と申し上げました。なぜならば、村の復興状況を見ておきますと、

まず、食料の配給がございませう。その後、村の人々は、ある程度食料が行きわたりますと、その次に何を考えるかといひますと、村の寺の再建なのです。そして、村の寺を村人の勤勞奉仕で造り、お坊さんと呼んでくる。そして、村では仏教の儀式をするのです。食料が十分行きあたり揃った次にでてくる問題といへば、私たちはどうしてあの様な目に遭ったのか、カンボジア人とは何なのか、というアイデンティティーの問題がでてきます。そのときに文化遺産は民族のルーツを示し、自負の気持をおこさせます。それが国造りにおいて、ある種の精神的バックボーンになるのです。そういう意味では文化遺産とか遺跡が民族再発見の貴重な資料になるのです。だから遺跡の保存修復は大切なのです。